

(第3種郵便物認可)

11月半ばの日曜日、秋空が広がった東京では、青空が高く澄み渡っていた。そんな秋の一日、上野から谷中、根津の辺りを逍遙(しやうよう)した。

上野駅で地下鉄を降り、不忍口から上野の山へ数十段の階段を上ると、上野の森美術館に出る。そこを右に折れ、左手に正岡子規記念球場を見ながら少し歩くと東京文化会館が右手に見える。日曜日の朝だからであろう、子規記念球場では、大人たちが草野球に興じており、それを何人かの道行く人々が見物している。

東京文化会館を抜けさらにまっすぐ歩いていくと国立西洋美術館、国立科学博物館と続き、かつて岡倉天心が美術部長を務めた帝



とろ 山本 太郎

秋の一日

室博物館、現東京国立博物館が正面に見える。東京国立博物館を正面に見ながら、道を左に折れると、旧東京音楽学校奏楽堂が左に、国

際子ども図書館を右に見ながら進むと、東京藝術大学に出る。左手が美術学部、右手が音楽部となっている。その美術学部の門を入ったところにある大学美術館で、ある芸術展が開催されていた。尊厳の芸術展——と銘打たれた芸術展だった。そこでは、砂漠のなかの強制収容所で、限られた材料と道具で作られた作品の数々が展示されていた。硬質木材であるカバノ

キやマメ科の植物であるメスキートで作られた彫刻、乏しい画材で描いた絵画、廃材で作られた日常使いの椅子や机。故国の文化をしる茶道具や着物姿の人形なども展示されていた。明日が見えない日々のなかでさえ、未来を志向して作られた作品には、決して華やかではないが、澄んだ静けさのなかにある美しさのようなものがあった。1942年2月に出された米国大統領令9066号によって、12万人の日系人が、強制収容所に送られた。今から70年ほど前のことだった。帰り道は、上野高校の横を抜け、言問い通りを根津の方角へ下りていった。15年ほど前に本郷に暮らしていたころはよく歩いた道だった。あまり変わらないはずなのに、普通だった店などをのぞいてみた。昔は、相変わらず晴れ渡っていた。(長崎大学熱帯医学研究所教授)